



Title	『源氏物語』 享受作品の可能性 : 須磨巻の源氏詠 「うしとのみ」の解釈をめぐって
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	詞林. 2023, 73, p. 18-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90835
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』 享受作品の可能性

——須磨巻の源氏詠「うしとのみ」の解釈をめぐる——

瓦井 裕子

一、享受作品の可能性

須磨に謫居する源氏は、八月十五夜の月を見て都を恋い、昨秋の月夜、朱雀帝と語り合ったことを回想する。

その夜、上のいとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの、院に似たてまつりたまへりしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなはず、かたはらに置きたまへり。

うしとのみひとへにものは思はえて左右にもぬるる袖うしとのみかな
(『源氏物語』須磨・②・203)

源氏詠「うしとのみ」(以下、当該歌)は、現在の注釈書においておおむね同様に解釈されている。たとえば『新全集』では以下の通りである。

帝に対して一途に恨めしいとばかりも思われず、懐かしくもあって、左に右にそれぞれの涙で濡れる袖であるよ

頭注／「ひだりみぎにもぬるる袖」とは、片方では帝の恩寵を感じて流す涙に、もう一方では勅勘のつらさに流す涙に濡れる、の意。

このような現行の解釈は、資料においてはどこまで遡りうるだろうか。古注釈書を繙くと、各書がこの場面に持ついた関心は、第一には源氏の口ずさむ「恩賜の御衣は今此に在り」の典拠指摘にあったことが分かる。当該歌はこの漢詩と一体的に理解しうるものであったのか、長く直接の注釈対象とはならなかった。当該歌の解釈に言及するもっとも早いものは、管見の限り、永享四年(一四三二)に成立した『源氏物語提要』である。

うしとのみひとへに物はおもほへてひたりみきにもぬる、袖哉

是は菅家配所にて延喜の帝より給はりし御衣を取出し給ひて、去年今夜侍清涼、秋思詩篇独断腸、恩賜御衣今在此、捧持すくも毎日拜余香、とあそはしける詩の心をおも

ひ出してよみ給へり。我かくなりてみかとへ御うらみは
なけれども、せめて一人に帰する道理にて、うらめしく
思ふ時も有との歌也。^③

典拠指摘に続き、上の句について、「自分がこうなったこと
について朱雀帝に恨みはないが、「一人に帰する道理」、罪や
物事の結果は最終的に君主一人が負うのだから、恨めしく思
うときもある」という。この「一人に帰する道理」は以降の
注釈書に引き継がれることはなかった。

現行の解釈の淵源は、十五世紀後半に成立した肖柏の『源
氏物語聞書』に求められる。

うしとのみひとへに物はおもほえて 左近(マ)とはうしと一
篇に思はかりにはあらて御衣を身にそへてなつかし
う恋しき心もありと也。^④

第四句の「左右」が意味するのは、「うしと一篇に思はかり
にはあらて」「なつかしう恋し」という相反する二つの感情
だと述べている。この解釈は以降多くの古注釈書に引き継が
れ、現在まで連綿と続いてきた。

如上のことは、当該歌に対する現在の一般的な解釈が、『源
氏物語聞書』の成立した十五世紀後半までは遡りうる一方、
それ以前の解釈についてはまったく不分明であることも示し
ている。これは当該歌のみの問題ではない。和歌の解釈を明
文化して今に伝える資料として注釈書は極めて重要な位置を
占めるが、注釈書に拠っても室町時代より前の解釈にまで遡

ることは、多くの場合非常に困難である。

この解釈が不分明な時代においても、当然のことながら作
中歌自体は享受されつづけてきた。当該歌もそれなりに注目
されたりしく、『物語二百番歌合』『風葉和歌集』などに採ら
れ、平安末期から和歌における享受例も散見される。

散文作品における当該歌の享受も非常に早くから行われた。
もっとも早い事例は当該歌から作品名を取った『左も右も袖
ぬらす』で、『狭衣物語』に登場することから、『源氏物語』
成立後数十年以内にこのような享受作品が生まれたことが知
られる。『とりかへばや物語』にも当該歌をもとにした表現
が出る。このように、当該歌は注釈書の注釈対象となる以前、
それもかなり早い段階から、和歌や散文で注目されてきたの
であった。

平安・鎌倉時代、あるいは室町時代のある時期以前にこの
ような享受の状況があり、その享受作品自体の研究も行われ
ているものの、現在の我々は、当該歌が当時どのような解釈
をされ、どのような解釈に基づいて享受作品が生成されて
いったのかについて、ほとんど知るすべを持たない。

本稿はこのような状況に対し、『源氏物語』を享受した和
歌や散文にも当時の解釈が反映されている可能性を提起し、
注釈書出現以前の解釈に遡りうる資料として位置づけようと
するものである。従来は、和歌における源氏取り、物語や日
記における『源氏物語』引用という観点から語られてきたこ

これらの享受例は、『源氏物語』の側から見れば、注釈書が未だ存在していない時代における解釈の痕跡を留めるものとして扱える。もちろん、享受例は換骨奪胎の結果である可能性を念頭に置く必要がある。しかし、これらは注釈書によって明文化される前の解釈に遡りうる極めて少ない手がかりの一つであることも事実である。そこで、本稿では当該歌を用いながら、享受例の研究上の可能性を探っていきたい。

二、異なる解釈の痕跡

当該歌は、現行の注釈書では解釈がほとんど確定しており、大きく揺れることはない。とは言え、『源氏物語』成立から現在に至るまで、異なる解釈が存在しなかったわけではない。慶長三年（一五九八）成立の『岷江入楚』の中には、現行の解釈が一様に取らず、議論の俎上にも載せることがない解釈の存在を示す注記がある。

うしとのみひとへに物はおもほえてひたりみきりにぬる、袖かな

秘 おもほえて也 わか身かやうの身に成ても上へはうらみなき也 されとも又時としてはうらめしき事もある也 さて左右とはいへり 弄 左右とはうしと一偏に思ふはかりにはあらで御衣を身にそへてなつかしく恋しき心もありと也 聞書朱雀の御事をさまゝにおもふ也 箋聞 左右とは御衣の

かたしけなきにもよほす感涙とかたゝは身上のなけきと也 おもほえて清濁両義也 濁よし 朱雀の御事偏にうきはかりにてはなきと也

傍線部の三条西公条説では、第三句「思ほえて」が濁音であると指定され、波線部の三条西実枝説でも濁音が支持される。これは現行通りの校訂であるものの、実枝説として記された「清濁両義也」という注記から、当時濁音「思ほえて」とする説に加え、清音「思ほえて」とする説の両方が存在していたことが明らかとなる。

第三句を濁音で読むべきだとする注記は、天文六年（一五三七）以前に成立した『浮木』に遡る。

うしとのみひとへに物はおもほえて

此恩賜の御衣ヲ偏ニまきらかされたり うへの御さまの故院ニ似たてまつり給しヲ左右トハ云 ひとつと書たる本は書写の誤也 文字にこるへし

「文字にこるへし」、つまり濁音で解釈すべきだと説き、天正三年（一五七五）に成立した『萬水一露』でも、宗硯説として第三句を「思ほえて」と濁音で読むことが記される。

うしとのみひとへに物はおもほえてひたり右にもぬる、袖かな 弄 左右とは一篇に思はかりにはあらで御衣を身にそへなつかしく恋しき心もありと也 細 我身かやうに成ても上へ恨はなき也されと又時としてはうらめしき事もある也さて左右とは云り 硯 おもほえて

のて文字可濁也。^開源哥也左遷の事はかりを思には
あらて又恩賜御衣を身にそへて忝と思ほとに左右に
袖のぬる、と也^⑧

十六世紀の注釈書がこのような注釈をつけた背景には、当時この清濁に言及する必要性があったことを示唆している。それは、おそらく実枝説として記された、清音での解釈と濁音での解釈が混在していた当時の状況のためであり、このような状況を受けて、前掲の注釈書は第三句を清音ではなく濁音で「思ほえて」と解釈すべきだと述べたと理解される。

十六世紀より前は清濁どちらで読まれたのか、あるいは両方が通用していたのかは明らかでない。しかし、十六世紀に清音「思ほえて」による解釈が存したことは、当該歌と当該歌享受を考える上で見逃しがたい情報である。

「思ほえて」「思ほえて」のような前後の内容の接続に関する清濁の議論は、他の和歌においても行われた。例えば、藤原興風詠、

貞保親王の、後の宮の五十の賀たてまつりける御屏
風に、桜の花の散る下に人の花見たるかた描けるを
詠める

藤原興風

いたづらに過ぐす月日は思ほえて花見てくらす春ぞすく
なき^⑨ (『古今和歌集』・賀・351)

は、『顕注密勘抄』でその清濁が問題にされている。

いたづらにすぐる月日はおもほえて花みてくらす春ぞす
くなき

此歌に付て両様あり。一には第三句はおもほえてと
よむべし。其心は、常にすぐる月日はおほかるやう
に覚ゆれど、花見る春の心は月日のすくなき様に覚
ゆと云へり。一には、いたづらにすぐる月日はな
とおおぼえざるに、花みる春はすくなき様に覚ゆと
よめるは、其深云義也。但、あまりにや。後人の心
にまかすべし。今案に、前の義まさるべし。後撰歌
にも、

まちくらす日はすがのねにおもほえてあふよし
もなど玉のをならん

心詞等、今歌を思へるか。然者腰句もおもほゆる心
歟。おもほえずと云心には不^レ叶。

両説と被^レ注たるを実義之由存也。後撰歌は、必
不^レ可^三專守^二此歌^一。

顕昭は第三句を「思ほえて」「思ほえて」の両方で解釈する
説があることを紹介し、濁音のほうがよいかとしながらも、
後人に判断をゆだねる。

また、和泉式部詠、

折りてみし人の句ひの思ほえてつねより惜しき春の花か
な (『和泉式部集』・597)

は、『新編国歌大観』では第三句を濁音「思ほえて」とするが、

『和泉式部集全釈』では清音「思ほえて」とする。例年より花が惜しまれる理由として、「花を手折つて愛でた人の香りが思い浮かばないからだ／思い浮かべられるからだ」という異なる解釈がなされている。文脈としては清音「思ほえて」を採るべきであろうが、これらの例が示すように、前後の接続をどう捉えるかによって「思ほえて」「思ほえて」の両様の解釈がありえる。他の歌においても「思ほえて」「思ほえて」の清濁に議論がある中、当該歌が清濁両方で読まれたのも生じやすい事態であつただろう。

三、清音解釈における上の句

ここで、当該歌を濁音で校訂した場合と清音で校訂した場合とを示すと、次のようになる。

【濁音】 うしとのみひとへにものは思ほえて左右にもぬるる袖かな

【清音】 うしとのみひとへにものは思ほえて左右にもぬるる袖かな

濁音での解釈はすでに多くの注釈書でなされているため、本節と次節では、清音の校訂本文に対応する解釈を検討していきたい。清濁の別を考える際、当該歌で重要なのは、「思ほえて／思ほえて」の内容にあたる「うし」という感情と、「思ほえて／思ほえて」によって導かれる「左右にも」であると思われる。そこで、本節では「うし」を中心とする上の句、

次節では「左右」を中心とする下の句について確認する。

初句の「うし」について、現行の注釈書は一樣に朱雀帝に對する恨みだとするが、異論も提起されている。そこでまず、当該歌を含む場面について詳しく述べる。

この短い場面では、朱雀帝に對する源氏の感情が語られている。源氏は、昨秋親しく昔語りをした朱雀帝の様子、亡父桐壺院に似ていたことを恋しく思い出し、道真の詩「九月十日」の一節を口ずさむ。

去にし年の今夜 清涼に待りき

秋の思ひの詩篇 独り腸を断つ

恩賜の御衣は今此に在り

捧げ持ちて日毎に余香を拝す^①

（『菅家後集』・482・九月十日）

これは、大宰府にある道真が、一年前の残菊宴において醍醐天皇から下賜された衣を今も傍らに置き、日々天皇の面影をしのんでいることを詠うものである。源氏はこれを引用し、源氏もまた、かつて朱雀帝に下賜された衣を常に身近に置いていると語られる。

朱雀帝が源氏に衣を下賜したことは作中に見えない。ここでは道真の詩を重ね合わせるにより、都で帝と親しく語らった一年前と、一人異郷に流離する現在との対比を企図し、新たに付与された過去と考えられる。

当該歌はこのような状況で詠まれた。濁音に校訂した当該

歌の解釈は、先にあげた通りである。源氏は朱雀帝に対して「うし」という感情を抱いているが、「とのみひとへにものは思ほえで」によって「うし」は部分的に打ち消され、「うし」ばかりでなく、地の文にあるような「恋し」「なつかし」というべき感情もあるのだとする。

しかし、室町時代の注釈書の中では、「うし」についてもまた異なる解釈がなされてきた。『源氏物語提要』は「我かくなりてみかとへ御うらみはなけれども、せめて一人に帰する道理にて、うらめしく思ふ時も有」と、須磨に流離する源氏自身の現状を嘆くばかりではなく「一人に帰する道理」によって朱雀帝を恨めしくも思うと言うから、「うし」自体は源氏の境遇を指すと理解される。『細流抄』が「我身かやうに成ても上へうらみはなき也されと又時としてはうらめしき事もある也さて左右とはいへり」とするのも、『源氏物語提要』と同様、打ち消しのありかたに鑑みて、「うし」は「我身かやうに成ても」という自身の現状を指すことが分かる。『岷江入楚』では「左右とは御衣のかたしけなきにもよほす感涙とかた／＼は身上のなけきと也」と、自身の身の上に対する悲嘆であると述べる。室町時代には「うし」を朱雀帝への恨みとする注釈書は見当たらず、『萬水一露』に「左遷の事はかりを思にはあらて」とあるのが、「左遷」を許した朱雀帝に対する感情をいう可能性がある程度である。

近世に入ってからようやく、『源氏物語新釈』に朱雀帝への恨

みだという解釈が見出される。

うしとのみ 此御代にかくさすらへさせ給へるを恨みて
も且まことの御おほしは浅からぬを思ふに、かた
／＼につけて泪おつると也¹³⁾

これらを見ると、「うし」を朱雀帝への感情だとするものは比較的新しく、室町時代には「うし」を自身の境遇に対する評価とする解釈が行われていたと理解される。

このような解釈を採り、現行注釈書に修正を加えたのが鈴木日出男氏であった。

このような発想（稿者注・皇統を尊崇し、皇統の正義を通して自身の潔白を示そうとする）によっている源氏は、決して朱雀帝ゆえに流離せざるをえなかったとも、また朱雀帝は単なる右大臣勢力の傀儡にすぎないのだとも、思っていない。あの晩秋の対面での、心開きあった帝との共感が、増幅されながらここに顧みられているのである。末尾の歌の「ひだりみぎにもぬる袖」の語句には、流離の悲涙と帝寵への感涙を言いこめ、そこに源氏の心境が象徴されている¹⁴⁾。

と、「うし」は朱雀帝への感情ではなく、「流離の悲涙」、源氏自身の境遇への評価なのだとする。岡部明日香氏も、

この歌の初句「うしとのみ」についてであるが、朱雀帝の「勅勘」としての須磨退去を怨むならば、文字数の制限があるにしても、朱雀帝に対して「つらし」という語

を使つてもよさそうに見える。(略) 光源氏が詠んだ「うしとのみひとへにものは思ほえて」という句には、単に「自分を須磨へ追放した帝が恨めしいけれども懐かしい」というだけではなく、桐壺院の面影を持つ朱雀帝によって須磨退去へと追い込まれざるを得なかった運命を理不尽ととらえる感覚が根底にある。⁽¹⁵⁾と、当該歌の基盤をなすのは自身の運命への評価であるとし、両者ともに首肯される。

須磨巻を概観すると、「うし」は桐壺院崩御後、当該場面に至るまで、源氏の心をしめる大きな感情の一つであった。

これらの「うし」は、急変する世情や政敵右大臣方からの压迫に翻弄される自らの境遇に対する評価であり、朱雀帝を含めた他者には向かわない。当該場面は道真の詩を用いた新たなエピソードを付加しながら朱雀帝への敬慕を強調し、ひるがえって異郷にさすらうわが身の境遇を「うし」と感じる対照があざやかに描き出されていると捉えるべきであろう。

「うし」を朱雀帝に対する感情ではなく、自身の境遇への嘆きと捉え、第三句を「思ほえて」と清音で解釈した場合、源氏は「うし」とばかり思つてしまふと述べているのであり、上の句の解釈としては「自らの境遇が辛いとばかりひたすら思われて」となる。清音での解釈が描き出すのは、誰を恨むでもなく遠く離れた兄弟を慕い、異郷にさすらう自身の境遇にただただ苦しむ源氏の姿であつた。

四、清音解釈における下の句

このような清音での解釈では、源氏は自身の境遇が辛いという感情のみに支配されている。濁音での解釈と異なり「うしとのみひとへにものは思」が部分否定されないため、部分否定によって生じる「うし」ではない二つ目の感情を想定することができなくなる。当然、第四句「左右にも」に想定されてきた二つ目の感情「恋し」「なつかし」は排除されることになる。

『源氏物語聞書』が、

うしとのみひとへに物はおもほえて 左近とはうしと一篇に思はかりにはあらて御衣を身にそへてなつかしう恋しき心もありと也

と述べて以来、当該歌に関するほとんどの注記は、第四句「左右」の内容を指摘することに主眼をおいてきた。上の句の解釈が示され、それが「左右」の説明でもあるのが基本的な在り方で、「左右」が「うし」と「なつかしう恋しき心」という二つの感情を指すとする考え方はほぼすべての注釈に共通し、現在まで引き継がれている。

では、古注釈書が言及してきた「左右」とはどのようなものなのであろうか。涙のために左袖も右袖も濡れるという発想の類例を確認すると、これが非常にめずらしいものであることが分かる。平安時代から鎌倉時代には、当該歌とこれに

影響を受けたらしい事例しか確認できない。また、「左右にも」ということは続き自体も、当該歌と当該歌を撰取したものの以外例を見ない特殊なものである。

当該歌には異同があり、第四句「左右にも」は、別本の陽明文庫本と穂久邇文庫本が「左も右も」とする。この二本はともに鎌倉写本であり、鎌倉時代には「左右にも」と「左も右も」の両様の本文が存在したことが知られる。意味上大きな相違はないため、以下では左右両方を指す例を一体的に扱うが、次節以降における享受例に関しては、詠者や作者が見ていた本文を反映している可能性¹⁸⁾があることを付言しておく。本節ではひとまず「左右にも」や「左も右も」の意味するところを確認したい。

『源氏物語』中、「左右」は二〇例見られる。これらの多くは、「御階の左右に膝をつきて」(藤裏葉巻)、「御髪は左右よりこぼれかかりて」(若葉下巻)のように物理的な左右を言うか、「左右大臣、内大臣」(行幸巻)、「左右の近衛立ち添ひたる作法」(藤裏葉巻)のような役職を言うものである。

一方、少数ながら特徴的な用法もある。これについて詳細に調査した大塚誠也氏がその対象とした四例を、私に次の通りまとめた。

① 空蟬巻。小君が源氏を空蟬の寝所に手引きするが、空蟬はこれに気づいて逃れる。小君は、源氏からは逢瀬の失敗を責められ、空蟬からは手引きを叱責されて、「左

右に苦しく思」う。

② 須磨巻(当該場面)。源氏が朱雀帝と親しく語り合ったことを回想し、「うしとのみひとへにもは思はえで左右にもぬるる袖かな」と詠む。

③ 真木柱巻。鬚黒が玉鬘のもとへ行く準備をしながら、北の方に「大臣たちも左右に聞き思さんことを憚りて」と言い訳する。玉鬘のもとへ通わなかったら、太政大臣である源氏と、内大臣であるかつての頭中将がどう思うかが憚られるという。

④ 若葉上巻。女三宮の降嫁先として夕霧が候補にあがると、夕霧は降嫁が実現すれば雲居雁と女三宮との板挟みになり、「左右に安からずは」自分の身が苦しくなろうと案じる。

氏は平安時代の「左右」の用例を検討し、『源氏物語』の特殊な「左右」に「板挟み」と「あれやこれや」という意味が重ね合わせられているとし、「漢文の影響」を受けて「紫式部によって拓かれた」表現だとする。「左右」は『類聚名義抄』において「トニカクニ」と訓ぜられるように、漢文においては「あれやこれや」という意味でも用いられるが、稿者はただちに首肯したいと考える。複数の利害関係者が関わる際に生じる感情の錯綜は、漢文の「左右」の意味するところと大きく異なっていて「漢文の影響」とは言いがたく、また「板挟み」といえるのは①④のみである。①③④の「左右」は特

定の二人の人物を指しつつ、その二者が両側から迫ってくるような心理的圧迫感を表現することが主眼であり、①④が「板挟み」の意味を持つのは、状況に鑑みるとそう解釈しうるということであると思われる。

当該場面の「左右」はこれらとも異なり、一義的にはあくまで左袖と右袖を指すに留まる。あるいは物理的な左右を言う例に分類してもよいかもしれないが、『源氏物語聞書』以来、ここに「うし」と「恋ひし」「なつかし」という二つの感情の喩えを見てきたのであった。

このような二つの感情は、当該歌を清音で解釈すると想定できなくなることは先に見た通りである。清音の場合、「左右にもぬるる袖かな」は一つの感情によって左袖も右袖も濡れると言っていることになるから、両袖が濡れてしまうような激しい涙を強調している表現と理解せざるをえない。下の句は「激しい涙によって片袖だけでなく両袖が濡れてしまふ」のようになる。当該歌全体の解釈としては、「自らの境遇が辛いとはかりひたすら思われて、左側も右側も流れ落ちる涙に濡れてしまふ袖だ」とでもしておきたい。

五、享受例から見た当該歌の解釈

このような現行のものとは大きく異なる解釈が、十六世紀には存在していた。この解釈がいつ発生し、どの程度広く行われたのかは不明という他ない。しかし、この清音解釈の片

鱗が、かなり早い享受例の中に看取しうる。それが、平安・鎌倉時代に詠まれた当該歌の撰取歌であった。⁽²²⁾

当該歌を撰取する歌のうち、管見の限りもつとも早いものは、養和元年（一一八一）に詠まれた定家の初学百首である。

（恋廿首）

袖の上は左も右も朽ちはてて恋はしのばんかたなかりけり
〔拾遺愚草〕・63

「涙で左袖も右袖も朽ちてしまひ、恋を秘めておくすべがない」と、恋という一つの感情によって涙が滂沱と流れ、両袖が濡れて朽ちてしまふと詠む。恋の涙の激しさのために片袖ばかりか両袖までも濡らしてしまふという程度のはなはだしさを表現するものとして、「左も右も」が機能している。

『新撰六帖題和歌』の光俊詠も同様である。

（片恋）

わが袖の左も右もぬれながらなど片恋の涙なるらん

〔新撰六帖題和歌〕第四帖・1230・光俊

定家詠と同じく、恋心によって左袖も右袖も濡れるほど激しく泣いているという。そして、「片恋なのになぜ袖は両方が濡れるのか」という、片方／両方を対比させるところに眼目がある。

次の寂身詠も、

袖はみな左も右も朽ちはてて涙をせかんしがらみぞなき

〔寂身法師集〕・恋・339

「恋の涙で袖は左も右も朽ちはててしまい、涙をせきとどめることができない」とする。これも涙の程度が激しいことを、左袖も右袖も朽ちはてたと言うことで表現している。

時代は下るが、次の例も同様である。

(冬日陪太上皇仙洞同詠百首応製和歌)

正二位行権大納言臣藤原朝臣経継上)

(恋二十首)

なみだ河左も右もせきつつみいづかたよりか世にはもるべき

(『文保三年御百首』・1369)

恋の涙を左袖でも右袖でもせきとどめているはずなのに、どこからか世に知られてしまうことを詠む。ここでも、「左も右も」は両袖でもせきとどめることができない恋の涙の激しさを表現している。

このように、平安・鎌倉時代に当該歌を撰取する和歌においては、恋などの感情によって片袖ばかりでなく両袖までも濡れてしまうとする、涙の激しさをあらわす例が複数残る。

現在、当該歌は二つの相反する感情にさいなまれることを「左右にもぬるる袖」と表現するところに主眼があると考えられている。しかしながら、当該歌を撰取する和歌において、その趣向を取らず一つの感情のみを詠むものが複数確認されるのは、いったいどのような理由なのであるうか。もちろん、撰取にあたっては何らかの工夫を加えることも一般的であるため、当該歌の趣向が必ずしもそのまま撰取歌に持ち込まれ

るわけではない。しかし、一つの感情を詠む撰取歌を複数確認しうるこの状況は、各撰取歌の創意の結果というだけでは片付けられない様相を呈している。なぜならば、当該歌の解釈とその享受例のあいだに密接な関係が看取されるからである。

例えば、三条西実隆は『弄花抄』において、

うしとのみひとへに物はおもほえて

左右とは一篇に思ふはかりにはあらて御衣を身にそへてなつかしく恋しき心もありと也²⁰⁾

と記し、『細流抄』においても、

うしとのみ 我身かやうに成ても上へうらみはなき也されと又時としてはうらめしき事もある也さて左右とはいへり

としているため、濁音で当該歌を解釈していたことが明らかである。その実隆は、当該歌を撰取して次の和歌を詠む。

忍涙恋

三首懐紙之内

おさふるも落つるもおなじわが袖の左右にもうき涙かな

(『雪玉集』・1826)

あふれる涙をおさえるのも涙が落ちるのも同じ自分の袖だ、左袖も右袖も秘めた恋の涙に濡れてしまう、と詠む。ここでは二つの感情こそ詠まれないものの、涙をおさえる袖、それにもかかわらず涙が落ちる袖、という対立が打ち出される。

これは、実隆が行っていた濁音解釈の主眼である二つの相反する感情を、秘めた恋のために涙を流す行為にあてはめた結果と理解することができ、摂取歌が詠者の当該歌に対する理解を反映することを示している。これはごく自然なことであり、摂取歌しか残らないほかの『源氏物語』作中歌の場合においても、摂取歌が本歌をどのように解釈していたかを抽出することが決して無意味ではないことを示唆している。もちろん摂取歌が本来の趣向をどこまで転換しているかの検討は必要であるが、摂取歌が当時行われた解釈を反映し、失われてしまった解釈の痕跡を残しているのだとしたら、注釈書の組上に上る前の解釈を伝える資料として、たいへん貴重なものと位置付けることができるのである。

本節で見た、一つの感情によって両袖が濡れるとする摂取歌は、その和歌に偶然あらわれた一回的な趣向ではなく、詠者の当該歌に対する解釈が反映されたものと捉えうる。⁽²⁴⁾十六世紀に存在したという清音解釈がこの時代からすでに行われており、その解釈の具体的なあらわれが、本節で見たような一つの感情の激しさを詠む和歌であったと考えられる。

六、二つの感情を詠む和歌

この時代にももちろん、二つの対立項を詠む摂取歌は多い。次にあげる歌は九条道家によって詠まれた。詠歌年次は不明だが、道家が主催した建保三年（一二一五）の内大臣家百

首に「名所恋」題があり、この時のものと推定される。

（百首歌詠みはべりける名所恋 前関白）

うしと思ふものからぬる袖の浦_左右にも浪やたつらむ

（『新勅撰和歌集』恋歌四・897）

恋の相手を「うし」と思うとまず詠み、「思ふものから」と逆接で繋げていく。このような「ものから」で接続される場合、近い時代を例にとると、「恋してふことを誰かははじめけんつらきものからあはれとぞ思ふ」（『殷富門院大輔集』・114・恋）は恨めしいけれども愛おしいとし、「つらしとは思ふものからふし柴のしばしもこりぬ心なりけり」（『新古今和歌集』恋三・1224・女を恨みて、今はまからじと申してのち、なほ忘れがたくおほえければ、つかはしける・左衛門督家通）は、女を恨んで別れようとしてからも忘れがたく、恨めしいとは思ふものの懲りないとする。「いかなれば寝てもさめてもつらしとは思ふものから人の恋しき」（『洞院摂政家百首』・恋・1460・光俊）でも、恨めしいと思ふものの恋しいとしている。これらを見ると、相手を恨めしく思う気持ちがあり、反面やはり恋しい、とする二つの感情が「ものから」で接続されることが理解される。

道家詠では「うしと思ふものからぬる」とするのみで、二つ目の感情に言及してはいないものの、例で見てきたような「恋し」という感情が想定される。「うし」とは思ふものの、「恋し」さによって袖が涙に濡れてしまう」と二つの感

情を響かせ、「左右に浪がたつて左袖と右袖を濡らすのだらうか」とする。相反する二つの感情を詠み、その二つの感情によって左袖と右袖が濡れるとするのは、源氏の当該歌の解釈のありようと一致する。

次の『新撰六帖題和歌』の為家詠も同様である。

(涙)

恋しさもつらさも袖は涙にて左右にも朽ちぬべきかな

(『新撰六帖題和歌』第四帖・1247・為家)

「恋しさ」と「つらさ」という二つの感情によって、左袖も右袖も涙に朽ちてしまいうさだ」と言う。これも源氏の当該歌が二つの感情を想定することと一致している。

また以下にあげる例は、二つの感情ではないものの、二人の人物によって片袖ずつが濡れるとするものである。『為信集』には次の贈答歌がある。

忍びたる男ありと聞けば、心にも入れて、同じところなる人のもとに文やるを見て

ひとつ身にあらぬものから唐衣あかでも袖をかへしつるかな

返し

から衣左も右もぬらすらんいま片袖はたれがためにぞ

(『為信集』・26・27)

この贈答歌は詞書や和歌の詠み手の判別が困難だが、返歌は「あなたは左袖も右袖も濡らしているのですが、片方は

私のための涙として、もう片方は誰のための涙なのでしょう」とする。ここでは当該歌を引きながら、一人によって左袖が、もう一人によって右袖が濡れるとする。

このような詠み方は龜山院の和歌にも確認できる。

(照慶門院より被出之

詠百首和調)

無常

春と秋と左も右もぬるる袖わがふた親のなき月日とて

(『龜山院御集』・198)

春に亡くなった父・後嵯峨天皇と、秋に亡くなった母・大宮院のためにそれぞれの袖が濡れるとする。これも、一人のために左袖が、もう一人のために右袖が濡れるとするものである。

『為信集』も龜山院詠も、「左も右も」は二人の人物を表す。二者によってもたらされた感情によって、片袖が一人のために、もう片袖がもう一人のために濡れると詠むのであった。

これも当該歌の濁音解釈がもつ相反する二つの感情を、二人の人物にあてはめた結果であろう。

和歌以外に目を向けると、『とりかへばや物語』にも二者への涙を「左右」と言う例がある。

いま一方はた、すかし出だされにし後、今はいよいよもて離れつれなきに、まことに枕よりあとより恋のせめくる心地して、左右の袖を濡らしわびつつは、かたがたの

形見と、中納言のいと見まほしかりければ、……⁽²⁶⁾

（『とりかへばや物語』 巻第二・270）

中納言だにさて籠り居たまひなば、この人をも何ごとにかはつつまん、さてこそは見め、と思ふかねごと、胸つぶれて、うれしういみじきに左右の袖濡るる心地して、つらしとまで思ひ寄られけるわが身も恨めしかりければ、……
（『とりかへばや物語』 巻第二・298）

これらは共に、宰相中将が四の君と尚侍との二者を思つて泣く表現で、『為信集』や亀山院詠に先行する早い事例である。

このような「左右」で二つの感情や二人の人物をあらわす撰取歌は、濁音で解釈した結果であると言えよう。どの歌が必ずこの解釈をしていたと判断することはできないものの、清音解釈ともしき例と濁音解釈ともしき例の双方が一定数確認できるこの状況から、平安・鎌倉時代において、すでに清音での解釈と濁音での解釈の二様の説が存在していたことが推定される。清音解釈の存在は十六世紀の注釈書に至ってはじめて明記されたが、それを遡るかなり早い段階から清音解釈を含む二様の解釈が行われていたことが、撰取歌を検討することによって垣間見えてくるのである。

七、当該歌享受例の解釈

ここまで、十六世紀の『萬水一露』に記される清音解釈が

平安時代からすでに存在していたと考えられることを述べてきた。この清音解釈の存在は、享受例の側からもまた重要である。

『とはすがたり』には、当該歌を引用し、自身の感情を述べる箇所が二つある。一つは、後深草院と新枕を交わした二条が、翌朝、院に伴われて御所へ赴く場面である。

夜もすがら泣き濡らしぬる袖の上に、薄き単衣ばかりを引き掛けて立ち出でたれば、十七日の月西に傾きて、東は横雲わたるほどなるに、桜萌黄の甘の御衣に薄色の御衣、固文の御指貫、いづよりも目とまる心地せしも、誰がならはしにかと、おほつかなくこそ。（略）御車さし寄せたるに、折知りかほなる鳥の音も、しきりにおどろかしがほなるに、観音堂の鐘の音、ただわが袖に響く心地して、「左右にも」とは、かかることをやなど思ふに、……⁽²⁷⁾
（『とはすがたり』 巻一・205～206）

二条はその感情を当該歌引用によって、傍線部「左右にも」とは、かかることをや」と喩える。ここで二条がどのような状態を「左右にも」と述べているのかは判断しづらい。急な展開に強い困惑を感じてただ激しく泣いていると捉えることもでき、破線部のように恐ろしさの後深草院への愛着という二つの感情を指すと理解することもでき、波線部「鳥の音」と「鐘の音」を対比させて涙をもよおすと読むことも可能である。

もう一つは、有明の月の告白を聞いた後深草院が、それを二条に伝える場面である。

御物語あるを聞くにも、「左右にも」とは、かかることを言はまじと、涙はまづこぼれつつ、さても、ことがらもゆかしく、御出でも近くなれば、更くるほどに、……
(『とはずがたり』 卷三・367)

ここも、涙が激しく流れているのか、あるいは後深草院と有明の月との間で揺れているのか、また、後深草院に対する複雑な感情を言うのか、一つに決定するのは難しい。

これに対する注釈を見ると、『新大系』は、卷一について「後深草院を恨めしく、また慕わしく思つて、二通りに涙を流すことを言う」とし、卷三については「院に対してありがたくも、恨めしくも思う意であらう」と、断定することをやや躊躇している。

このような注は、当該歌の二つの感情によって涙を流すという解釈を前提にしたものである。しかし、この時期おそろく清音解釈も存在していた。『とはずがたり』の「左右」の解釈の可能性は複数あるにもかかわらず、引用される当該歌を濁音で解釈して『とはずがたり』に適用することで、解釈の可能性が狭められているのではないか。

最後に、散逸物語『左も右も袖ぬらす』にも言及しておきたい。この作品は、『狭衣物語』に「袖濡らす」といふ物語⁽²⁸⁾「袖濡らす宰相の通ひたまひし所」と見え、『狭衣物語』

以前の成立と知られる。『二百番歌合』の物語書目一覧には「左毛右毛袖湿」とあり、詠者名としても、

六十四番 左 同 右 袖奴良須

左 右大臣通ひそめたまひて後、六条院、「おりたちてくみはみねども渡り河人のせとはたちぎらざりし」を、と聞こえさせたまひけるに 玉鬘の内侍のかみ

みつせがはわたらぬさきにいかでなほ涙のみをの泡ときえなむ

右 承香殿女御、「言はじといむにはあらず浮き沈みおひたる蘆のねにさはる身を」とのたまひしに

関白⁽²⁹⁾ 左も右も袖ぬらす宰相中將足也

ことわりにうきしづまるる水の泡のやがて消えぬるわが身ともがな

(『物語二百番歌合』・六十四番)
と、傍線部のように注が附されている。樋口芳麻呂氏が指摘したように、正式な作品名を『左も右も袖ぬらす』と言ったようである。この作品名が当該歌に影響を受けたものであることは、先行研究が一致して認めるところである。

『左も右も袖ぬらす』は『二百番歌合』や『風葉和歌集』に比較的多く資料が残されており、さまざまに復元が行われている。その際、和歌資料による復元に加え、作品名自体が影響をうけた当該歌との関わりからも考察が行われることが多い。『古典全書』は、

この左右の袖を濡らすといふのは、この物語では、宰相中將が一つは中納言の君の為に濡らすのであらうが、他の一つは、誰の為、何の為であるかは明らかでない。「もとの上」(本妻)である(11)の前関白女の出家した事に対してか、(13)の宣旨の死に涙してか、(9)の承香殿女御を獲得できない為か、等々、想像はいろいろ可能である。

とし、樋口氏は、

『袖ぬらす』の書名は、すでに先学の研究で明らかにされているように、『源氏物語』須磨の巻の(略)によって命名されたものであらうから、朱雀院ならぬ中納言の君に対する「うし」(宰相中將に一言も告げずに姿を消したことへの恨めしさであらう)、「恋し」(中納言の君の行方を見失つての思慕の情であらう)の気持ちに左右の袖をぬらす宰相中將の物語の意と解される⁽³⁰⁾。

と推測する。これらは当該歌に二つの感情が詠まれていることを前提とした推論である。しかし、いざその二つの感情をこの『左も右も袖ぬらす』の復元内容にあてはめようとする、どのような人物へのどのような感情を指しているのか、が途端に曖昧になってしまうのである。

もちろん散逸物語という性質上、完全な復元は望めない。しかし、当該歌によって無理に二つの感情を想定し、資料からは読み取りえなかった復元内容を加える必要があるとは思

われない。はたしてこの作品の復元に、二つの感情を持つとする当該歌の解釈を用いてよいのであらうか。むしろ一つの感情によって涙が激しく流れるという清音解釈に立つと、宰相中將が中納言の君を思慕する涙の激しさと捉えることができ、少なくとも現存資料の範囲内では無理のない復元が可能になると考える。

八、おわりに

以上、十六世紀には当該歌が清音でも理解されていたことを指摘し、清音の場合の解釈を行った。その上で、平安・鎌倉時代の享受例において、清音解釈がすでに反映されていたと考えられることを述べてきた。これは、当該歌を撰取した平安・鎌倉時代の和歌を、当該歌の解釈を知る手がかりとして位置づける試みである。また、当該歌を引用する他作品においても、その解釈に幅をもたせる余地があることに言及した。

本稿は、清濁どちらの解釈をすべきであると決定するものではない。現在濁音「思ほえで」とのみ校訂・解釈されていることも、適切な検討の結果であらう。問題は、過去になされた解釈が顧みられることなく、現行の解釈のみであらゆる事例が理解され、その解釈が流布していか分らない時代の事象までも現行の解釈で上塗りされていくことである。当該歌に即して述べるなら、少なくとも十六世紀以前の当該歌

享受例を扱う際には、清音での解釈を排除しないことが求められる。そうすることにより、当該歌を撰取する和歌や引用する作品を、無理に現行の解釈に引きつけず考え得る余地が生まれくる。

このような解釈の揺れは、和歌における源氏取りの方法を考える上でも見逃せない。たとえば定家詠のような、秘めた恋によって両袖が激しく濡れてしまうとする和歌がどのよう
に『源氏物語』を利用しているかを検討する際、当該歌の解釈が当時においても現在と同様に行われていたのかを確認しなければ、源氏取りの方法の指摘にも大きな乖離が生じる
ことになりかねない。

作中歌について、現行とは異なる校訂・解釈が行われていたことは、本来なら注釈書が明記しないかぎり判明しづらい。しかし当該歌に関しては、室町期の注釈書によって清音でも解釈されたことが明らかとなる。古注釈書にわずかに残る「清濁両義也」という注釈は、当時の解釈の状況を反映した記述であると同時に、かなり古い解釈を窺い知ることができる手がかりとして機能している。古注釈書には室町以降の解釈しか残らない場合であっても、わずかな記述から、相当早い段階の解釈にまで遡ることが可能になるかもしれない。

清音解釈がいつから生じたかは不明だが、平安・鎌倉時代の当該歌の享受例の中に実際にその解釈で詠まれたものがある可能性があり、現行とは異なる解釈が行われた世界が垣間

見えてきた。『源氏物語』を享受する作品は、当時の解釈を伝える資料としても非常に重要な価値を秘めているのである。

【注】

- (1) 阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館 一九九四～一九九八年）。なお、引用にあたって私に表記を改めた箇所がある。
- (2) 伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版 二〇〇一年）
- (3) 稲賀敬二編『源氏物語古注集成 源氏物語提要』（おうふう 一九七八年）
- (4) 伊井春樹編『源氏物語古注集成 弄花抄 付源氏物語閑書』（桜楓社 一九八三年）
- (5) 下の句「左右にもぬる袖かな」の解釈にはやや揺れがある。『新全集』や『新潮集成』では、「うし」と思う涙によって片袖が濡れ、「恋し」「なつかし」と思う涙によってもう片袖が濡れる、つまり二つの感情によって片袖ずつ濡れる、とする。一方、そこまで明確にしない『新大系』『玉上評釈』『鑑賞と基礎知識』などでは、二つの感情で両袖が濡れるとするに留まり、この場合、片袖が濡れるにとどまらない涙の激しさを言う可能性がある。しかし当該歌は、おおむね朱雀帝に対する「うし」と「恋し」という相反する感情を抱えた源氏が、涙に両袖、あるいは片袖ずつをぬらしている」と解釈される。
- (6) 中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 岷江入楚 自十二須磨至廿六常夏』（武蔵野書院 一九八六年）
- (7) 中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 源氏秘義抄 源氏最要抄

- 浮木 源氏抄 紫塵愚抄』(武蔵野書院 一九八二年)
- (8) 伊井春樹編『源氏物語古注集成 萬水一露 第二巻』(校楓社 一九八九年)
- (9) 『新編国歌大観』(日本文学 web 図書館) により、表記等、私に改めた。以下、和歌資料はこれによる。
- (10) 久曾神昇編『日本歌学大系 別巻 五』(風間書房 一九八一年)
- (11) 川口久雄校注『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』(岩波書店 一九六六年)
- (12) 伊井春樹編『源氏物語古注集成 内閣文庫本細流抄』(校楓社 一九八〇年)
- (13) 久松潜一監修 秋山虔・鈴木日出男編『賀茂真淵全集 第十三巻』(続群書類従完成会 一九七九年)
- (14) 鈴木日出男「朱雀帝と光源氏」―『源氏物語』ノート―(『源氏物語虚構論』東京大学出版会 二〇〇三年/初出『成城国文学論集』第一三三号 一九八一年三月)
- (15) 岡部明日香「須磨退去の漢詩文引用―光源氏の朱雀帝思慕からの考察―」(秋澤互・袴田光康編『考えるシリーズ3 源氏物語を考える―越境の時空』武蔵野書院 二〇一一年)
- (16) 「まして大將殿は、ものうくて籠りゐたまへり(賢木巻)」、「見知りたまはぬ世のうさ(賢木巻)」、「うきものと思ひ棄てつる世(須磨巻)」、「かばかりにうき世の言(須磨巻) など。
- (17) ただし、十六世紀前半の『浮木』は「うへの御さまの故院に似たてまつり給しヲ左右トハ云」とする。
- (18) 池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』中央公論社 一九五三年、加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』(風間書房 二〇〇一年、

源氏物語別本集成刊行会『源氏物語別本集成』『源氏物語別本集成 続』(おうふう 一九八九〜二〇〇二年・二〇〇五〜二〇一〇年)、加藤洋介「源氏物語校異集成(稿)」(http://www.2kansai-u.ac.jp/ok_matsu/) による。

- (19) 拙稿「御子左家の『源氏物語』 摂取歌と依拠本文」(『和歌文学研究』第一二二号 二〇二二年六月) に詳しく述べた。
- (20) 大塚誠也「左右」の修辭法の展開―紫式部から後冷泉朝へ―『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六一号 二〇一六年二月
- (21) ③は、鬚黒から見た源氏と内大臣の意向は一致していると考えられ、対立する二者の間で困惑する「板挟み」とは言い難い。また、氏は「紫式部や赤染衛門の交流、後冷泉朝における女房文化圏内の流行というような、書き手の交友圏の問題としても捉えられる」とするが、赤染衛門は両側としての左右が、後冷泉朝の例は歌合の左方と右方を述べるものであり、『源氏物語』の「左右」とは根本的に異なると考える。
- (22) 本歌が影響歌か、あるいは摂取の程度の問題はあるものの、基本的にすべて当該歌を摂取するものとして扱う。
- (23) 注(4)に同じ。
- (24) 定家には当該歌の摂取歌のほかに、『物語二百番歌合』がある。
左 須磨にて八月十五夜、内の上の御ことなど思ひ出でき
こえたまひて
うしとのみひとへにものは思はえて左右にもぬる袖かな
右 逢坂山のさねかづら、さまざま苦しき御心のうちに
人知らばけちもしつべき思ひさへ後枕ともせむころかな
(『物語二百番歌合』・九十三番)
当該歌と合わされる狭衣詠は、狭衣が女二宮への思慕に苦しむ中

詠まれたもので、恋心に責め立てられるような辛さを詠む。秘密の恋の苦しさを詠むものが選択されており、二つの感情は結番の焦点になっていない。しかし一方で、一つの感情のみが前提になっているかという点、詞書には「さまざま苦しき御心」とあり、左の詞書にも「内の上の御ことなど」とあって、判断の難しいところである。

(25) 『為信集』については、以前拙稿「『為信集』成立年代の再検討」(『王朝和歌史の中の源氏物語』和泉書院 二〇二〇年／初出『中古文学』第一〇四号 二〇一九年一月)でその成立年代を検討し、十二世紀後半から十三世紀前半の人物ではないかと結論した。なお問題の多い作品ではあるが、今回はその推定で考え、ここでも鎌倉時代の例として扱う。

(26) 三角洋一・石埜敬子校注・訳『新編日本古典文学全集 住吉物語 とりかへばや物語』(小学館 二〇〇二年)

(27) 久保田淳校注・訳『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集 とはづがたり』(小学館 一九九九年)

(28) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『新編日本古典文学全集 狭衣物語』(小学館 一九九九年)

(29) 樋口芳麻呂『源氏物語』と散逸物語―『左も右も袖ぬらす』物語を中心に―(寺本直彦編『源氏物語』とその受容』右文書院 一九八四年)

(30) 注(29)に同じ。

(かわらい ゆうこ・就実大学)